

## 小学校音楽科における「思いや意図」に関する先行研究調査

高以良 智也（長崎大学大学院教育学研究科）

西田 治（長崎大学人文社会科学域（教育学系））

### 1. 目的と背景

本稿の目的は、小学校音楽科における思いや意図に関する研究のレビューを通して、思いや意図に関する現状と課題を明確にすることである。

研究の問いとして、①思いや意図をいつもたせるか、②思いや意図をいかにもたせるか、③それを実際の表現にいかにつなげるか、の3点を設定し、文献レビューを行った。

本研究の端緒は、長崎市内の小学校における教育実習において、「表現に対する思いや意図をもつ」ということに指導者として難しさを感じたことである。「思いや意図」について調査してみると、先行研究から統一的な見解を見出すことができなかった。このことから、関連する先行研究についてレビューし整理する必要があると考えた。

### 2. 調査方法

文献の検索および文献収集は、以下の方法および手順で行った。

(1) 文献検索は、CiNii を用い、キーワード検索を「音楽科 思いや意図」で行った（最終アクセスは2021年12月28日）。その結果、15件の論文が該当し、その内、閲覧可能な13件の論文を調査対象とした（表1）。

(2) (1) で対象とした13件の論文の中から研究の問いに関する内容を抽出し、比較検討した。

表1 分析の対象となった文献リスト

事例	論文
1	野口智世・萩野真紀「ICTを活用した小学校音楽科の授業実践 ―歌唱指導での取り組み―」『三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育学・教育実践』72, 2021, pp. 547-552
2	新山王政和・安藤朗広「小学校音楽科における「思考を伴った試行錯誤」による「音楽づくり」(3) ―表したい思いや意図に向かって創り上げていく活動―」『愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編』69, 2020, pp. 1-9
3	長山弘「小学校音楽科におけるプログラミング教育のあり方の検討 ―授業実践事例を手がかりに―」『初等教育カリキュラム研究』7, 2019, pp. 55-67
4	山口（藤田）文子「教員養成大学における「保育内容の研究」・表現（音楽）の研究 ―小学校音楽科「思いや意図をもって歌う」への発展をコンセプトに、フレー

	ベルの教育思想から流れるものを視野に入れて― 『茨城大学教育学部紀要. 教育科学』 66, 2017, pp. 35-42
5	渡邊健二・濱田宏明・五代香織「思いや意図を基にして表現・鑑賞する力を育む音楽科授業の創造」 『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』 26, 2017, pp. 391-402
6	田中龍三「初等音楽科教育法における「子どもの表現力育成」に関する指導 ―ドラマ教育の手法を活用して―」 『大阪教育大学紀要. 第5部門, 教科教育』 65(1), 2016, pp. 39-46
7	権藤敦子・伊野義博・黒田清子・Pema Wangchuk「歌唱における学習過程の再考―ブータン歌謡ツァンモの調査をてがかりに―」 『初等教育カリキュラム研究』 3, 2015, pp. 23-35
8	井上寛士「生徒の音楽的表現力を高めるアルトリコーダー指導の工夫 ―第2学年「『夏の思い出』を歌うように演奏しよう」の指導を通して―」 『茨城大学教育学部附属中学校研究紀要』 44(0), 2015, pp. 61-72
9	中嶋俊夫「小学校音楽学習指導要領の理念「思いや意図をもって」をどう捉えるか―小学校教員対象の研修（神奈川県立総合教育センター主催）―」 『横浜国立大学教育人間科学部紀要 1 教育科学』 13, 2011, pp. 111-128
10	近藤円佳「思いや意図をもって表現するための学習指導の在り方 ―音楽を表現する喜びや達成感を味わえる授業づくり―」 『公開研究発表会発表要項』 56, 2011, pp. 51-60
11	近藤円佳「思いや意図を表現するための音楽科学習指導の在り方」 『宇大付属中研究論集』 60, 2011, pp. 52-59
12	新山王政和・寺島真澄「音楽専門の教師が担う学校内音楽活動における中核的な役割とコーディネーターとしての責任 ―全校音楽集会の指導をモデルとしてクラス授業への応用を模索した実践―」 『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』 13, 2010, pp. 195-202
13	山崎浩隆「学級合奏における表現の工夫についての一考察 ―特に強弱に関して―」 『熊本大学教育学部紀要 人文科学』 58, 2009, pp. 13-19

### 3. 分析結果

①～③の問いに該当する記述が見られた文献を表2、それぞれの文献で取り上げられている領域、分野について表3に示している。表3については、該当している領域または分野を○で、その中でも主として扱われているものを◎で示している。

表2 問いに対応する記述の有無

事例	①いつもたせるか	②いかにもたせるか	③実際の表現にいかにつなげるか
1		○	
2	○	○	○
3	○	○	○

4		○	○
5	○	○	○
6		○	○
7		○	○
8		○	○
9		○	
10			○
11			
12			○
13	○	○	○
該当数／事例数	4／13	10／13	10／13

表3 領域および分野の分布

事例	表現領域			鑑賞領域
	歌唱	器楽	音楽づくり	
1	◎			
2			◎	
3	○	○	○	
4	◎			
5	○	◎	○	◎
6	◎	◎	○	
7	◎			
8		◎		
9	◎	○	○	◎
10	◎	○	○	○
11				◎
12	◎	◎	○	◎
13		◎		
該当数／事例数	9／13	8／13	7／13	5／13

以下、①～③のそれぞれの項目で考察する。【 】内は、該当する事例の番号を示している。

① 「思いや意図をいつもたせるか」について

思いや意図をいつもたせるかについて、活動の事前にもたせる場合と活動の時中でもたせる、また、更新する場合があることが明らかになった。

i) 活動の事前に「思いや意図」をもたせる【事例 2, 3, 5, 13】

これらの先行研究では、「思いや意図」をもたせる場面が活動の事前であることが示されている。音楽科の表現活動では、「思いや意図」に向けて表現を工夫していくことから、活動の事前に「思いや意図」をもたせることが必要であることが読み取れる。

ii) 活動の途中で「思いや意図」をもたせる、また、更新する【事例 3, 5】

これらの先行研究では、「思いや意図」をもたせる場面が (i) に加え、活動の途中で示されている。音楽科の表現活動では、活動の事前にもった「思いや意図」が表現を工夫する試行錯誤の段階で新たなものへと変更され得るとということが示されている。

② 「思いや意図をいかにもたせるか」について

思いや意図をいかにもたせるかについて、事例 1~13 の分析の中で、以下の内容が抽出された。

- (あ) ICT 機器で絵や写真という視覚的な情報を提示する【事例 1】
- (い) 自分たちの歌声を客観的に聴く活動を取り入れる【事例 1】
- (う) 子供の身近にあるイメージしやすいものを扱う【事例 2】
- (え) 思いや意図にあった表現について試行錯誤しながら考えさせる【事例 3】
- (お) 適切な教材選択をする【事例 4】
- (か) 教師の言葉かけから生まれる会話を重点に置いた指導を行う【事例 4】
- (き) 歌の内容理解を重点に置いた指導を行う【事例 4】
- (く) 音楽の良さや面白さを引き出す発問を工夫する【事例 5】
- (け) 楽曲を聞いて感じた思いを書き出させる【事例 5】
- (こ) 思いや意図を共有する活動を取り入れる【事例 5】
- (さ) 子どもの想像の中の世界の中にいる立場を演じ、誘い込むように声をかける【事例 6】
- (し) 表現する場面の具体的な状況をイメージするための声かけや発問をする【事例 6】
- (す) 音楽を細分化して「このような部分はどのように演奏する。」といった形で考えさせる【事例 8】
- (せ) 皆が参加できる場を設定する【事例 9】
- (そ) 他者との関わりの中でコミュニケーションを計りながら表現活動をする【事例 9】
- (た) 表現内容に共感し、意味解釈（コンテクスト）を共有する場を設定する【事例 9】
- (ち) 身体表現を伴った活動を取り入れる【事例 9】
- (つ) 感じ取った感覚や現象を言語化することを行う【事例 9】
- (て) 表現の選択肢を絞り、比較聴取をする【事例 13】

これらの内容は、手立てに関するものと手立て以外に関するものに分類できる。

i) 思いや意図をもたせる手立てに関するもの

大きく分けて「楽曲に関する情報の提示の工夫」、「学習活動の工夫」、「学習プロセスの工夫」、「教師による発問・声かけの工夫」の4つに分類することができた。

○楽曲に関する情報の提示の工夫

(あ) ICT 機器で絵や写真という視覚的な情報を提示する

○学習活動の工夫

(い) 自分たちの歌声を客観的に聴く活動を取り入れる

(き) 授業における歌の内容理解を重点に置いた指導を行う

(け) 楽曲を聞いて初めに感じた思いを書き出させる

(こ) 思いや意図を共有する活動を取り入れる

(ち) 身体表現を伴った活動を取り入れる

(つ) 感じ取った感覚や現象を言語化することを行う

(て) 表現の選択肢を絞り、比較聴取をする

○学習プロセスの工夫

(え) 思いや意図にあった表現について試行錯誤しながら考えさせる

(す) 音楽を細分化して「このような部分はどのように演奏する」といった形で考えさせる

○教師による発問・声かけの工夫

(か) 教師の言葉かけから生まれる会話を重点に置いた指導を行う

(く) 音楽の良さや面白さを引き出す発問を工夫する

(さ) 子どもの想像の中の世界の中にいる立場を演じ、誘い込むように声をかける

(し) 表現する場面の具体的な状況をイメージするための声かけや発問をする

楽曲に関する情報の提示の工夫は、絵や写真という視覚的な情報を ICT 機器を活用して提示することで、楽曲に対するイメージを膨らませたり、仲間と自分の思いを交流させたりすることが可能になるということである。これからの教育現場において、ICT 機器を適切な場面で活用することの必要性は多く述べられている。思いや意図をもたせる場面での ICT 機器の活用の具体的なあり方については、今後の実践で有効性を検討する必要があるだろう。

学習活動の工夫は、児童が思いや意図をもつ、あるいは明確にするための学習活動となっている。楽曲の内容理解や言語活動、身体表現など、学習活動として目新しいものはあまりなかったが、これらの学習活動と思いや意図のつながりを捉えることができたのは大きな収穫であった。抽出された学習活動は多岐にわたったが、扱う楽曲や歌唱、器楽、音楽づくりなどの活動の違い、児童の実態に応じて学習活動を選択することが大切であろう。

学習プロセスの工夫は、どのように表現するかについて考えさせることで、表現に対する思いや意図を明確にさせるというものである。事例 8 では、音楽を細分化することによ

り表現について考えやすくなることについても示唆されている。これらの工夫については、①の活動時中で思いや意図をもたせる、また、更新することにも関連しており、合わせて今後検討を進めていきたい。

教師による発問・声かけの工夫は、教師の発問や声かけによって、楽曲のよさや面白さに気づかせることや内容をイメージ、理解できるようにするといったものである。これらは、楽曲の理解というところで思いや意図をもつことにつながるだろう。楽曲の理解が深まる発問・声かけについて今後検討することも必要だろう。

ii) 思いや意図をもたせるための手立て以外に関するもの

大きく分けて「教材の工夫」、「学習活動の場の工夫」の2つに分類することができた。

○教材の工夫

(う) 子供の身近にあるイメージしやすいものを扱う

(お) 適切な教材選択をする

○学習活動の場の工夫

(せ) 皆が参加できる場を設定する

(そ) 他者との関わりの中でコミュニケーションを計りながら表現活動をする場を設定する

(た) 表現内容に共感し、意味解釈（コンテキスト）を共有する場を設定する

教材の工夫は、児童がイメージしやすいといった適切な教材を選択するというものである。適切な教材とはどのようなものであるのかについては記述がなかったが、児童がイメージしやすいという部分を手掛かりに教材を選択していく必要があると考えられる。各出版社の教科書で扱われている教材もちろんこの点には注意していると思うが、児童の実態に応じて教科書外から教材を選択することも必要だろう。

学習活動の場の工夫は、児童が思いや意図をもつための前提となる場の設定のことである。具体的な手立てというところに目を向けがちだが、手立ての効力を発揮させるためにも学習の場を整えることも行っていく必要があるだろう。

③ 「それを実際の表現にいかにつなげるか」について

思いや意図を実際の表現にいかにつなげるかについて、事例1～13の分析の中で、以下の内容が抽出された。

(ア) ICT機器を活用し思いや意図と音楽を形づくっている要素などの整合性を試行錯誤させる【事例2】

(イ) 思いや意図と音楽を形づくっている要素などを結びつけて表現し、納得のいく音楽ができるよう、音楽を形づくっている要素などを試行錯誤させる【事例3】

(ウ) 思いや意図と音楽を形づくっている要素などを結びつけて表現し、納得のいく音楽ができるよう、思いや意図について改めて設定させる【事例3】

- (エ) 適切な教材選択をする【事例 4】
- (オ) 教師の言葉かけから生まれる会話を重点に置いた指導を行う【事例 4】
- (カ) 歌の内容理解を重点に置いた指導を行う【事例 4】
- (キ) 思いや意図を可視化し、表現の工夫の観点を見出しやすいようにする【事例 5】
- (ク) 他者とのコミュニケーションの中で考えさせる【事例 5】
- (ケ) 実際の表現が思いや意図をどれくらい表現できているかについて考え改善させる【事例 5】
- (コ) 子どもの想像の中の世界の中にいる立場を演じ、誘い込むように声をかける【事例 6】
- (サ) 表現する場面の具体的な状況をイメージするための声かけや発問をする【事例 6】
- (シ) 基礎となる技能を習得させる【事例 8】
- (ス) 教師と生徒、生徒同士の信頼関係を育成する【事例 10】
- (セ) 複数人で合わせて表現活動を行う際には、それぞれの思いや意図も大切だが、1つを選択するというも行わせる【事例 10】
- (ソ) 音楽専門の教師による思いや意図を表現につなげるための指導方法をその他教師が知ることができる場を設定する【事例 12】
- (タ) 学習の対象となる教材曲の作曲の過程を辿らせる活動を行う【事例 13】

これらの内容は、手立てに関するものと手立て以外に関するものに分類できる。

i) 思いや意図を実際の表現につなげる手立てに関するもの

大きく分けて「ICT 機器の活用」、「学習プロセスの工夫」「教師による発問・声かけの工夫」、「学習活動の工夫」の 4 つに分類することができた。

○ICT 機器の活用

(ア) ICT 機器を活用し思いや意図と音楽を形づくっている要素などの整合性を試行錯誤させる

○学習プロセスの工夫

(イ) 思いや意図と音楽を形づくっている要素などを結びつけて表現し、納得のいく音楽ができるよう、音楽を形づくっている要素などを試行錯誤させる

(ウ) 思いや意図と音楽を形づくっている要素などを結びつけて表現し、納得のいく音楽ができるよう、思いや意図について改めて設定させる

(ケ) 実際の表現が思いや意図をどれくらい表現できているかについて考え改善させる

(タ) 学習の対象となる教材曲の作曲の過程を辿らせる活動を行う

○教師による発問・声かけの工夫

(オ) 教師の言葉かけから生まれる会話を重点に置いた指導を行う

(コ) 子どもの想像の中の世界の中にいる立場を演じ、誘い込むように声をかける

(サ) 表現する場面の具体的な状況をイメージするための声かけや発問をする

○学習活動の工夫

(カ) 歌の内容理解を重点に置いた指導を行う

(キ) 思いや意図を可視化し、表現の工夫の観点を見出しやすいようにする

ICT 機器の活用は、思いや意図とそれを表現する際の音楽を形づくる要素などとの整合性を考える際に有効であると考えられる。ICT 機器の利点には、音楽を音声と画面との両方で確認できることがある。さらに、実際の表現を記録として残すことができるので、気になったところを何度も繰り返し聴くことができ、思いや意図と音楽を形づくっている要素などの整合性を試行錯誤する際に役に立つことが考えられる。

学習プロセスの工夫は、思いや意図と実際の表現の整合性を試行錯誤するという活動と学習の対象となる教材曲の作曲の過程を辿らせる活動が挙げられていた。思いや意図と実際の表現の整合性を試行錯誤することは、音楽を形づくっている要素などをより深く理解することにつながるだろう。

教師による発問・声かけの工夫は、②でも述べたように、楽曲の理解というところで、思いや意図と実際の表現をつなぐ際にも有効であると考えられる。

学習活動の工夫は、楽曲の内容理解や思いや意図を可視化する活動が挙げられている。楽曲の内容理解については、その内容理解から思いや意図が明確になり実際の表現につながることを考えられる。思いや意図の可視化については、まず、思いや意図を可視化する段階でそれがより明確になり、そして、可視化したものをもとにすることで、表現の工夫を考えやすいということが考えられる。

ii) 思いや意図を実際の表現についながる手立て以外に関するもの

以下、6点である。

○教材の工夫

(エ) 適切な教材選択をする

○協働的な学び

(ク) 他者とのコミュニケーションの中で考えさせる

○技能の習得

(シ) 基礎となる技能を習得させる

○学級の風土づくり

(ス) 教師と生徒、生徒同士の信頼関係を育成する

○思いや意図の統一

(セ) 複数人で合わせて表現活動を行う際には、それぞれの思いや意図も大切だが、1つを選択するというこゝも行わせる

○指導技術の獲得

(ソ) 音楽専門の教師による思いや意図を表現につなげるための指導方法をその他教師が知ることを設定する

教材の工夫は、②の内容と同様で、適切な教材というものを児童の実態に応じて選択する必要があるだろう。



協働的な学びは、表現の工夫を考えたり、実際の表現と思いや意図の整合性を考えたりする際には、他者と意見を出し合いながら行うことが大切であることが示唆されている。

技能の習得は、思いや意図を実際に表現する際には、殆どの場合、演奏する技能が必要となるということである。この技能の習得がなければ、思いや意図を表現することにはつながらない。しかし、従来の音楽科の授業では、この技能の習得に力をいれるあまりに、「表現に対する思いや意図をもつこと」にまで辿り着けていないことが多いように思える。ICT 機器を活用した音楽づくりの授業では、PC などが演奏を自動で行ってくれるものもあり、思いや意図と実際の表現をつなぐ活動を主として行うことができるが、それが難しい歌唱、器楽の活動でいかに思いや意図の表現にまでつなぐかは、今後検討が必要である。

学級の風土づくりは、教師と生徒、生徒同士の信頼関係が必要であることが述べられている。これは、音楽科の授業に限るものではないが、表現活動において、他者の自由な表現を受け入れられる雰囲気、安心感というものはなくてはならないものである。直接的に思いや意図と実際の表現をつなげることには関係しないが、前提として必要なものであろう。

思いや意図の統一は、複数人で合わせての表現活動において、思いや意図を統一することが大切であるというものである。思いや意図は児童一人ひとりがもつものであるが、グループや学級での演奏では、それを統一したほうがまとまった演奏になる。また、授業のねらいによっては、統一する必要がないときもあるだろう。

指導技術の獲得は、これまでの視点とは異なり、思いや意図を実際の表現につなげるための教師の指導技術を向上させるというものである。そして、事例 12 では、指導技術を共有する場を設けるという取り組みについて述べられている。優れた指導技術について共有する場を設定することは、より多くの児童が表現に対する思いや意図をもつことにつながる事が考えられる。

#### 4. 考察

本稿の目的は、3つの分析の枠組みに基づいて音楽科の「思いや意図」に関する文献レビューを行い、それを通して小学校音楽科における「表現に対する思いや意図をもつこと」について、現状と課題を描き出すことであった。以下、結果を踏まえて考察する。

##### (1) 思いや意図をいつもたせるかについて

思いや意図をいつもたせるかについて、活動の事前にもたせる場合と活動の時中でもたせる、また、更新する場合があることが明らかになった。思いや意図をもたせる場面についての記述がある文献では、思いや意図を活動の事前にもたせるという学習プロセスが確立されており、それが一般的であると考えられる。しかし、活動の中で新たに思いや意図が生まれることや更新され得ることについては、筆者にとって新たな視点であり、そのことに触れている文献も2事例と少ない。このことから、活動の時中で思いや意図をもたせる、また、更新することについては今後研究が必要だろう。

##### (2) 思いや意図をいかにもたせるかについて

文献のレビューを通して、思いや意図をいかにもたせるかについて、手立てに関して4つの工夫、手立て以外のものに関して2つの工夫が抽出された。これらは音楽科の指導法全般に言えることであるが、「(え) 思いや意図にあった表現について試行錯誤しながら考えさせる」は特徴的な点であろう。しかし、事例の中では、「試行錯誤の中でもった思いや意図」をどのように学習に組み込んでいくか、については述べられていない。この点に関して(1)と関連させ、今後研究が必要である。

### (3) 思いや意図をいかに実際の表現につなげるか

文献のレビューを通して、思いや意図をいかに実際の表現につなげるかについて、手立てに関して4つの工夫、手立て以外のものに関して6つの工夫が抽出された。課題としては、以下、2点が抽出された。

まず、学習プロセスの工夫の(イ)、(ウ)で共通に述べられている「納得のいく音楽」についてである。(イ)、(ウ)について述べている事例3では、思いや意図と実際の表現の整合性について考える際に大切なのは、実際に表現した音楽が納得のいく音楽であるかだと述べられている。確かに、児童の納得の上に学習は成り立つべきだと思うが、児童の納得のいく音楽が教師が児童に身に付けさせたい音楽であるとは限らない。ここで大事になってくるのは、教師による価値付けではないだろうか。良い音楽、悪い音楽を定めるのは、教師としておこがましいことであると思うが、褒める声かけなどによって、児童の納得を生み出すことも必要なのではないだろうか。この教師の価値付けについて、今回扱った文献の中では出てきていないことから、今後研究が必要だと考えられる。

次に、協働的な学びの中の「(ク) 他者とのコミュニケーションの中で考えさせる」についてである。思いや意図の先行研究においても、グループでの活動など、他者とのコミュニケーションの中で考える場面が多く見られた。しかし、その中でどのように思いや意図を扱っていくのかについて、グループ活動の手立てを述べているものは、ほとんどみられなかった。このことから、他者とのコミュニケーションの中で思いや意図をもたせる具体的な手立てについて今後研究が必要だろう。

## 5. まとめ

本研究では、「表現に対する思いや意図」について3つの視点で整理することができた。

ここで抽出された様々な工夫は、「思いや意図」の指導に限らず、音楽科の指導法全般にいえることが多くあった。「思いや意図」については、今後の課題として、活動の時中でもたせる学習プロセスの工夫や納得のいく音楽に向けた教師の価値付け、他者とのコミュニケーションのあり方が挙げられ、実践を通したより具体的な研究が必要と考える。

さらに、今回は研究の視点に含めなかったが、「思いや意図」の捉え方も論文によって異なったことから、「思いや意図」とは何かという概念の定義に関する研究を行う必要があると考える。